

LIBRA SQUARE

Book

最近、おもしろかった本

『対論 人は死んではならない』

小松美彦 著 春秋社 2625 円（税込）

「共鳴する死」の概念、「自己決定権」への懷疑 昨今の論点に対する有効な批判軸に

私が大学時代に熱心に出席していた授業の1つが小松美彦氏の「科学哲学」の授業だった。ドラマ「高校教師」の映像などを流しながら、自分の目で見て、耳で聞いて、頭で考えることの重要性を強調される小松氏の授業は、暗記一辺倒の受験勉強を終えたばかりの私にとって非常に新鮮であった。

そんな小松氏の対談集が、この「人は死んではならない」である。「操られる生と死」「自己決定権は幻想である」などと過激なタイトルを冠した著作は多いが、小松氏の思想は単純明快である。大叔母との生活、そしてその死などの経験から導き出された、「死」（死亡ではない）はその死にゆく個人に帰属するものではないという「共鳴する死」の概念、そして、人間の弱さや体制によるすり替えの巧妙さなどからくる「自己決定権」への懷疑がその思想の基礎となっている。

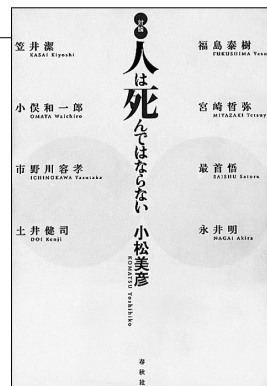
本著作では、その小松氏が、様々な分野の専門家と対談することにより、以上の考え方が浮き彫りとなり、その思想がより理解しやすくなっている。確かにその内容は、収録日か

らすでに年数が経っていることから具体的な事実等の部分で若干古くなっている部分もある。しかし、昨今の脳死移植ドナーの低年齢化を含める臓器移植推進の流れや、増加し続ける自殺者の問題、「自己決定・自己責任」を強調し、他者に無関心となっている現代人の姿などを見ると、小松氏の「共鳴する死」という考え方や、自己決定権への懷疑は、そういった論点に対する有効な批判軸を与えてくれる「新しい」ものであることが分かる。

また、自分の仕事においても、依頼者に十分な情報や十分な説明を与えるという専門家としての責務を果たさないまま、依頼者に自己決定をさせてはいないか、また、自由な自己決定をさせているように見えて、実は強制となっていないかなどということも考えさせられた。

安易に世の中に氾濫する情報・評価に踊らされずに、自らの頭で判断することの重要性を思い起こさせる1冊である。

（会員 大塚 博喜）



Cinema 心に残る映画

『イージー・ライダー』

1969年／アメリカ／デニス・ホッパー監督作品

現代に通じる数々の印象的なシーン 「自由」について考えさせる深い言葉

映画を見てもストーリーをすぐに忘れてしまうので、心に残っている印象的なシーンのある映画を紹介したい。

「イージー・ライダー」である。この映画が公開されたのは1969年であり、60年代から70年代に青春を送っていた世代の方にはご存じの方もおられると思う。青春時代を送っていた若者にうけた映画である。当時と今とでは、ずいぶん社会的背景が違うはずであるが、それでもなお、この映画には現代にも通じる印象的なシーンがいくつかある。

まず、主人公であるキャプテン・アメリカが、それまで腕にはめていた自分の腕時計を外し、これをじっと見つめ、道路に投げ捨て、バイクで旅に出るシーンである。この映画の最も象徴的なシーンだ。つい真似してみたくなる格好良さである。

また、キャプテン・アメリカとその相棒ビリーが、旅を続ける中で、そのヒッピー風の外観から、度々言われなき差別を受ける。当時、世界を覆っていた社会の閉塞感が嫌でも

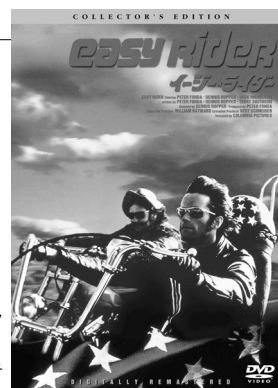
伝わってくる。

そして何より、2人が旅をする中で出会った弁護士ジョージ・ハンセンが、「自由を説くことと自由になることは全く別物で、自由を説く者も本当に自由な奴らを見るのは怖いものだ」というようなことを語り掛ける場面である。「自由」について考えさせられる深い言葉だ。

この映画で主人公の2人が求めていたものは「自由」であり、それが最大のテーマとなっている。様々なところで自由という言葉を目にする昨今、今一度、この映画を見て「自由」について考えてみるのもよいと思う。

ただし、このような映画だからか、ハッピーエンドというわけにいかない。何とも悔しい残念な最後である。

(会員 矢作 和彦)



『イージー・ライダー コレクターズ・エディション』
価格：1,980円 [期間限定]
発売・販売：ソニー・ピクチャーズエンタテインメント